

§6-3.

むすび

本研究より、肌色に対するステレオタイプは確かに存在することが把握された。また、そのステレオタイプは性別の判断に利用されることも明らかとなった。つまり、男性には色黒が好ましい、女性には色白が好ましいといった評価的な視点ではなく、対象をカテゴライズするという極めて認知的な段階においても肌色が参照されたことになる。緒言に対応させるならば、顔を認知するという段階においてさえ、「価値観」に基づいた修正がなされている可能性が得られたといえよう。

しかし、このような「認知」は認知という段階に留まらず、新たな認知を生む。そして、実体にも変化を加える力となり得る。Baudrillard (1981) は『シミュラクルとシミュレーション (Simulacres et simulation)』において、「起源も現実性もない実在のモデルで形づくられたもの、つまりはハイパーリアル」としてシミュレーションを定義した。男性、女性という二つの性別もこのようにシミュレーションとしての一面を持つものであると思われる。そして、シミュレーションを模倣することによって男性と女性は形作られ、「男性」「女性」が再生産される。役割、所作、関係性等はその最たるものであろう。だが、視覚的に摂取される男女の像もまた同様に考えることができるのかもしれない。それが悪いとは言い切れないが、少なくとも、そのような過程の上に我々の「見る目」が築き上げられている可能性については踏まえておくべきであろう。

我々は極めて能動的にもものを見ている。性別の判断も同様である。相手の顔によってその判断は決まると思いがちであるが、そのように判断するための基準は内的に構築されたものである。外的な刺激に合わせた認知システムが構築されているということをもまず考えなくてはならない。実験から得られた傾向は認知特性の一部分である。だが、本研究が日常的に何気なく行なわれる性別判断への関心を深め、男女の在り方を再考する一助となれば幸いである。